さなぎは関係を欲する
――さなぎ理論における他者との関係――

土　井　孝　典

論文要旨

本論では、思春期・青年期の自己確立のテーマにともない生じる不登校などの状態を「さなぎの時期」をみなす視点について、その諸側面を検討した。さなぎの視点は不適応をきたしている子に早急な外的適応を迫ることなく、彼らの内的成熟を待ち、見守ることが大切だとの理解をもたらした。一方で、「さなぎを見守る」という名のもとに成熟を当事者のみに委ねるような事態も生じてしまった。しかし実際には、さなぎが蝶になるプロセスでは、周囲の者も巻き込まれる形でさなぎのプロセスに入り、投影同一化を通じて当事者と同じテーマを生きさせられるような展開があることが事例をとおして示された。また、さなぎが蝶になるためには「啐啄の機」を逃さないことの大切さが示され、ここにも他者との関係が必要であることが示された。

キーワード【さなぎ、自己確立、投影同一化、親の役割、啐啄の機】

Ⅰ．はじめに

思春期・青年期の自己意識の高まりと、それにともなう自己確立のテーマに取り組むことは、思春期・青年期の者にさまざまな精神症状を引き起こすことがある。不登校やひきこもりといった状態もそのひとつといえよう。山中（1978a）や河合（1992）はこれらの状態に積極的な意味を見出し「さなぎの時期」と呼んだ。さなぎは外からみると何も変化がなく一見状態が滞っているようにみえるが、内的には芋虫が蝶に変化するという大きな変革が起こっている。これを人間の成長になぞらえて、不登校などの不適応状態を子供が大人になる前段階として捉え直した。芋虫がある一定期間を経ると蝶となってさなぎから出てくるように、不登校状態などとしてあらわれる内的な自己確立作業の時期を「さなぎの時期」とし、時が熟せば自ずと再び世界に出立していくことが期待されるとしている。

「さなぎの時期」に周囲の者にできることは「待つ」ことである。もし無理にさなぎをあけて蝶にさせようとしても、かえって死なせてしまうことになるだろう。このようなさなぎイメージが知られるようになったことで不適応を呈している子を無理に外に出そうとするのではなく、「さなぎの時期」を見守ろうという視点が広がった。しかしこれには問題もあった。「さなぎの時期」を見守る、すなわち時がくるのを待つという考えは必然的に成熟を当

事者に委ねることになり、周囲は何もできない、あるいはしてはいけないという理解も生まれるようになってしまった。また、もっと悪い場合は「さなぎを見守る」という言葉を免罪符として当事者に関わりともに悩むという姿勢を回避することにもつながった。

ただちに付け加えるが、山中はさなぎイメージとともに「窓」（山中、1978a、1978b、1996）という考えも提示している。「窓」はさなぎになっている当事者がある限局されたポイントをとおして世界に関心を示すときの通路である。例えばそれは漫画だったり、釣りだったり、音楽だったりする。「窓」として考えられるものは周囲には一見無駄なものであったり、それが不適応の改善にどう役立つのかと思われるようなものであったりすることも多い。しかし、例えば漫画では、友情や裏切り、恋愛などが描かれており、そこに自分を重ね合わせることによって世界のありようを納得し、自分を位置づけていくことができるようになる。また、釣りの場合はそれをとおして生態系（世界のことわり）を知ったり、あるいは釣り具を買いたいがために外の世界に一歩を踏み出すことになったりするかもしれない。山中（1978a）によれば、「窓」の意味を象徴的に理解し、当事者の流れに沿った内的成熟を促進するような関わりが求められるが、それは訓練された専門家でないと難しい部分があるだろう。結局のところ、一般的には「さなぎを見守る」という言葉のみが独り歩きし、そこで真に起こっているプロセスや必要な関わりについてはほとんど理解されていないと筆者の臨床経験上からは感じられる。

これはセラピストにもいえる。とくに初心セラピストは非専門家と同じく「さなぎを見守る」という言葉を前に関わりが難しくなっている場合がある。土井（2021）はさなぎを見守るあり方として、見守るなかでも局面を詳細に検討していくとさまざまな水準でセラピストが関わっており、ときには見守るとは一見矛盾した積極的な介入も行われることを示しているが、さなぎの機能や性質を詳細に検討していったものは他にはあまり見当たらない。

さなぎは適切に守られ、適切に関わりをもたれることにより、成熟し蝶が生まれる。そのためには、「さなぎの時期」とはどのような性質で、そこにおける展開にはどのような側面があるのかを詳細に検討しておくことが大事であろう。さなぎを詳細に検討していくことは「さなぎを見守る」という名の単なる放置にならないために意義あることと考えられる。

本論の結論を先取りすれば、さなぎは一方で閉じているものであるが、一方で水準を変えてみれば「開かれている」ものだと考える。後者の水準においては「周囲は見守る」―「さなぎは見守られる」という関係ではなく、周囲も当事者の内的成熟のプロセスに巻き込まれていく立場となる。何が閉じられ、何が開かれているか、本論では事例をとおしてその様相を検討していきたい。

II．さなぎ事例の提示

ここでは山下和美の『天才柳沢教授の生活』第13巻・第112話「旅の始まり」を取り上げる（山下、1999）。この話を取り上げる理由として、この話の主人公の貴明が自分の在り方に迷い、内向し、さまざまなプロセスを経て再び現実世界へと出立する様はさなぎ理論を検討していくうえで相応しいと考えられたためである。

この話はおそらく高校生と思わる貴明が主人公である。最初の場面で貴明が学校に行けていないことが示される。それに対して父親・母親は関わり方がわからず戸惑いをみせる。母親は「男の子には父親じゃなきゃ駄目なのよ」と関わりを押し付ける。一方、父親は貴明と話をしようと試みるが、貴明から「出席日数は足りているから大丈夫。無理に学校に行っていじめられでもして自殺するよりいいでしょ」といわれ一蹴されてしまう。父親が出て行ったあと、「今日あんたがヅラをはずして会社行ったら、僕も学校に行くつもりだったんだけどな」と貴明は独りつぶやく。

そんな貴明には気になっている人物がいる。向いの家に住んでいる柳沢教授だ。柳沢教授を評して貴明は「いわゆるインテリってやつだね。おまけに近所でも評判の人格者。嘘つきめ」とし、「おやじみたいなやつは大嫌いだけどああいう大人も同じくらいむかつく」と思っている。また、「クラスは興味のないやつの溜まり場だ。みんなと違っててそれでもみんなを認めさせるには僕自身がビッグにならなきゃいけないんだ。でもそうなれないのは自分自身が一番よくわかっている。おやじを見ればこの先僕がどういう人生を送るのかおおよそ見当がつく」とし、父親や柳沢教授ら大人をみてもそこに希望をもって自分を重ねられる大人は見当たらず、自分の在り方に悩んでいる姿が示されている。

ある日、貴明は柳沢教授の教え子であるヒロミツの姿をみかける。ヒロミツはパンクロックをやっている青年で、ロングヘアーを逆立て鼻ピアスをしており、一見してわかる異彩を放っている。ヒロミツに刺激を受けたのか、貴明は部屋でひとりエレキギターを奏でまくるがそれが結局何にもつながらないと悟ったのかまた落胆する。その晩の食卓で、父親が「ギターはどうだ」と話しかけ、父親も昔ビートルズのコピーをやっていたとの話が語られる。それに対して貴明は「ビートルズ・・(くすっ)」と馬鹿にしたように失笑する。父親は自分の思い入れのあるビートルズを馬鹿にされたと感じたのか、「ビートルズなくして今のロックは無いんだ」と強めの主張をし、それに続いて「父さんがいつまでも金出せると思うなよ」と厳しい一言を貴明に向ける。

再び柳沢教授との場面となる。貴明は向かいの家に住んでいる柳沢教授のことを毎日窓越しにみている。柳沢教授は夜9時になるときっちり就寝したり、パソコンの配置ひとつ変更したりするのにさまざまな条件を計算するといったこだわりをみせる。そんな柳沢教授の姿

に触発されたのか翌日の食卓場面で貴明は父親に「もっと好きなことしろよ。ビートルズでもなんでもいいからさ」と語りかけるが、父親は「ビートルズはお前嫌いだろ」と答える。

場面は変わり再び柳沢教授の様子を窓越しにみる貴明。難しそうな本を読んでいるにも関わらず嬉しそうに笑ったり、逆にある時には涙を流す姿を目撃することもあった。そんなとき、ふとギターの音が聞こえてくる。隣の部屋で父親がギターを弾いていたのだ。それは一音一音思い出しながら弾いているようでたどたどしくて聞いていられないようなものだったが、貴明はそれを聞いて涙を流す。

翌朝、貴明は意を決したかのように出勤時の柳沢教授をつかまえて話しかける。「おじさんひとつ聞いていい？生きることって何か意味があるの？」と。柳沢教授は「残念ながら私にはそれにお答える自信がありません」と答える。続けて貴明は教授が昨晩泣いていたことを指摘し「何が人格者だよ」と詰め寄る。対して教授は「その理由を君に説明するのはおそらく不可能でしょう。子供にしかわからない悲しみがあるように、大人にも大人にしかわからない深い悲しみが存在するのです」と答え、続けて「そして、悲しみが深い分、喜びもまた深く大きい」と答える。貴明は「あんたやっぱり変わってんね」といいつつも何か納得したような表情となる。そこに父親もやってきて柳沢教授に「あの、おはようございます」と面と向かって挨拶をする。その後、「途中まで一緒にいくか」と父親に促された貴明は「いいよ」と答え、父親と息子が朝の道のりをともに歩いていく姿でこの話は終わる。

Ⅲ．事例の検討

1．貴明の状態―さなぎとなり自分の在り方を模索する―

貴明は不登校である。とくにいじめられたなどの明確な理由は見当たらないが学校に行く気がしない。ではなぜ行けないのかの内実を検討すると、貴明が「自分が今後どう生きていったらいいのか？」といった実存的な問いにつまずいていることがわかる。自分は他の人と違う存在でありたい。だが、それになれる自信もない。自分の将来像を父親にみたいが、父親はしがないサラリーマンであり、さらにはカツラをかぶって出勤するという「自分」の姿を偽って生きている様がみられる。父親が胸を張って自信をもって生きていない姿は、窓越しに見る教授と父親の出勤風景の対比にも示されている。教授はいつも胸を張って歩いている一方、父親はいつも下を向いて歩いているのだった。この父親の姿に貴明は将来の自分像を重ねることができないでいた。その一方で「あんたがヅラをはずしたら学校にいくつもりだった」という発言からは、父親には「自分」を偽らずに堂々と生きている大人としてあってほしい、自分の将来を重ねられる像としてあってほしいと期待していることが推察され、貴明が将来の自分を同一化できる対象を求めていることがわかる。さらには「生きることって何か意味があるの？」と最後に教授に尋ねることからも、貴明が「自分がどんな大人にな

りうるのか」そこに「生きる意味はあるのか」という内的な問題に深くつかまっていることがわかる。このように自分の在り方といった内側の問題にエネルギーが注がれ、外側のこと（通常求められる登校や友人関係、学業など）に興味・関心が向かなくなるのは典型的な「さなぎの状態」であると見立てられる。

2. 親子関係の転機―貴明との関係により父親の「自分」が立ち上がる―

展開のひとつのきっかけになったのは、父親が貴明にギターの話をふった場面である。父親も昔はビートルズのコピーをやっていたことが語られ、それに対して貴明がビートルズを失笑する。父親は大事な青春の想い出であろうビートルズを笑われたことに腹を立てる。これは心理学的にいえば、父親のコンプレックスに触れたことになる。コンプレックスは普段は抑圧された形で無意識に存在するが、ときに自我を脅かすものとしてその存在をあらわにする（河合、1971）。ここではコンプレックスに刺激される形で普段は抑え込まれていた父親の別の側面が立ちあらわれたといえる。普段の自我が社会適応にともない主張を抑えてきた父親の「自分」だとすれば、ここで刺激されて出てきたのは自らの好きなものを大切にする自分なりの考えや感覚をもつ父親の「自分」といえる。後者の「自分」が立ち上がったことと呼応して、腫れ物に触るように接していた貴明に「いつまでも金は出せない」と、親子関係をより悪化させるかもしれないにも関わらず父親は「自身の考え」をぶつけるようになる。

貴明はさなぎの状態にあるといっても、現実のさなぎのようにまったく動かないわけではもちろんない。少なからず親とのコミュニケーションもとるし、自身の興味・関心にそって柳沢教授を観察したりもしている。その動きのなかでビートルズを巡るやりとりが起こった。なぜここで貴明がビートルズを失笑したかというと、これもまた貴明のコンプレックスが刺激されたからであろう。「これが好き」「これが大事」といえるものは、その人の「自分」に関わってくる。貴明はそれが見出せずにいた。見出せないでいるからこそ囚われ、ビートルズが好きという「自分」を示した父親に触れると貴明の何かが動き、それが失笑につながったと考えられる。この失笑によって今度は父親のコンプレックスが刺激され、それに応じて抑えていた父親の「自分」が立ち上がってきたことは上記のとおりである。

ここでは「さなぎ」という一見閉じている状態と見立てられるにも関わらず、周囲と関係し、周囲の者を変えてしまうほどの影響をもたらしていることを確認しておきたい。また、そのつながりの軸が当事者のテーマとなっているコンプレックスであることも確認しておきたい。

3. 「窓」としての柳沢教授

柳沢教授は内向している貴明にとって唯一関心が向いている「窓」と考えられる。将来の

自分を父親に重ねられない貴明は、また違ったタイプの大人である柳沢教授をとおして自分の在り方を模索していると思われる。しかし、柳沢教授もいわゆるインテリで人格者という括りであり、遠巻きにみている限り、貴明にとっては嘘くさい大人として捉えられている。思春期・青年期はまだ見ぬ大人をステレオタイプに捉えがちである。「大人は汚い」とか、「大人は社会で歯車になっている」など、大人を一括りにしてはそこを拒否することで自分を位置づけようとする。だが、柳沢教授は少し異彩を放っていることが目についてくる。教授は些細なことに異常なこだわりをみせたり、ときに笑いときに怒り、また泣くという姿をみせる。これは父親からはみることができない「自分」の考えや感情をあらわにして生きる大人の姿である。人と違う何者かになりたい貴明にとって、父親と違う柳沢教授の在り方は魅力あるものとして映っていたと思われる。

4. さなぎは現実との接触を求める

柳沢教授に「自分」の思うがままに喜怒哀楽を表現できる大人の可能性を見出した貴明は、それを父親にもみて大人の可能性を確信したいと考えたのだろう。父親に「好きなことをしろ」と勧める。これは勧めるというより、「自分をもつ大人」像を肉親である父親にみせてほしい、父親として大人の生き様は死んだものではないということをみせてほしいとの貴明の切なる願いであったと思われる。これに対して父親は「ビートルズはお前嫌いだろう」とつっぱねる。ここは息子の願いに乗ってくれない父親ということになってしまうが、腫れ物に触るがごとく息子のいうがままであった父親が「自分」の意見として息子の提案をつっぱねる姿を示している。これはパラドキシカルに貴明の求める「自分をもつ大人」像を示すことになっていて興味深い。

その後、父親がたどたどしくギターを奏でる場面となる。ここでは貴明からコンプレックスを刺激されるという形で揺らがされた父親が当時の「自分」とつながり直している。サラリーマンでヅラである父親が「自分」とつながる。大人になることは自分が完全になくなるわけではない。それを貴明は知りたかったのだと思われる。「自分」をもつ父親の姿が貴明の琴線に触れ、貴明は涙を流す。

それらの流れのなかで、貴明はとうとう柳沢教授に面と向かって話しかける。しかも「生きている」意味を問う。柳沢教授は「答えられる自信がない」と正直に答える。続けて貴明は人格者と呼ばれている教授が泣いていたことを批判する。これに対して教授は「大人には大人にしかわからないことがある」と返し、「そして、悲しみが深い分、喜びもまた深く大きい」と、大人の世界と子供の世界の境界を明確に示す。貴明はいまの自分のみえている世界の延長に大人の世界をみて、夢も希望もない世界を感じていたが、自分が思っている以上の世界が大人にはあり、そこには悲しみもあるがまた喜びもあるという豊かな世界が示唆される。

柳沢教授に大人の世界は子供の自分がみえている以上の世界であること、そこは自分が思う以上に喜怒哀楽がともなう世界であること、またそれは柳沢教授だけではなく、ビートルズが好きという父親にもあることが感じられ、これらが付合することにより、貴明は大人になっていくことに希望や納得が感じられ、再び世界へ踏み出すことになる。

この話は思春期・青年期の子供が悩み、内的にこもり、その模索のなかでさまざまな展開が起こり、そこで何かを摑み、再び世界へ出立していくプロセスをよく示しているといえるだろう。

Ⅳ．さなぎとの関わりで起こることの諸側面

1．さなぎ理論における「閉じている」という意味―外的要請と内的要請―

さなぎの時期に特徴的なことは「閉じている」ということである。山中はこの「閉じている」状態に「内閉」という語をあて、seclusion（鎖国）と訳している（山中、1988）。続けて山中は、江戸時代、日本は鎖国したことにより近代化が遅れたという側面があったものの、一方でキリスト教文化とヨーロッパ商業資本の流入を防ぐことによって、この時期に日本独自の文化を成熟させるに至ったとしている。これを個人に落とすと、他者の価値観や現実的要請から「閉じる」ことによって社会生活という外的適応からは退いてしまう一方で、当事者自身の固有の価値観・世界観を成熟させる契機となることが期待される。

鎖国は世界から基本的には閉じているものの、一方で「出島」など限定された通路に限っては世界との交流は続けていた。出島をとおして必要な情報を得て、また必要な交易は行っていた。鎖国における出島が内閉論では「窓」に相当する。基本的に当事者は世界から閉じているものの、「窓」という限定された通路をとおして世界から必要な情報を得て、また必要な関わりを行っているということができる。

ここで重要な点を整理しておきたい。「鎖国」において日本がまったく世界から閉じているわけではなく、日本の統治にとって脅威と考えられるものに対して閉じていたということである。裏をかえせば日本にとって必要なもの・有益となるもの・関心のあるものについては出島をとおして積極的に他国とも交流をしていたのである。つまり、鎖国は閉じていることが強調されるが、一方では開かれているという面もあるということである。グローバル化は世界との障壁をなくし、互いが自国の利益をもとに相互に駆け引きをしていき、そのなかである種の秩序が作られる世界である。そこには自由競争の原理が働いている。一方、鎖国は自国益を確保するために基本的には世界から閉じているなか、限定された形で交易は行われていた。言い方を変えれば、日本の都合によって世界との関わりを調整していたといえよう。グローバル化が自国の要請とともに世界の要請との関係のなかで自国のあり方のバランスをみつけていくものだとしたら、鎖国は相対的に自国の要請に従い、世界の要請の重みを

下げていくものといえる。つまり、鎖国には内的要請に比重がかかった「一方向性」が特徴といえるだろう。そして、一方向性ではあるがそのベクトルのなかでは世界との関係はもっているのである。

さなぎも同様に、外的要請からは関係が閉ざされているが、内的要請から生じる関係に対しては開かれている。さなぎといってもまったく閉じているわけではない。自身の興味関心にそって行動することもあれば、人間関係を求めることもあるといえる。内的要請に対しては開かれていることに注目すると、さなぎ状態である当事者が実は外界の物や人とさまざまな関係を展開させる様子がみえてくる。さなぎは単に外から見守られるだけに過ぎない孤立した一者ではないのである。

2. さなぎという問い―問いは動きを引き起こす―

さなぎのプロセスに子供が入ると、状況としては不登校やひきこもりといったいわゆる問題状況が発生する。さなぎ論の考えでは、一時的に外的なことが棚上げにされているなか、内的には「自己確立」という大作業をしているとされるのだが、それは通常なかなか外からは把握しにくい。必然、周囲にいる大人は困った状況に陥る。どのように関わればいいのかわからず戸惑い、自分の育て方が悪かったのだろうか、子供が学校に行っていないことが近所に知られたらどうしようなどと悩むことになるだろう。河合（1992）は「問題児」を問題のある子としてみるのではなく、大人に「問題」を提出している子と考えるという視点を提供している。これは例えば、不登校の子を問題児とみなすのではなく、「不登校という形を出すことによってこの子は我々に何を訴えかけているのだろう」と考えていくような視点である。問題を呈している子に真剣に関わると家族は思い悩みエネルギーは内向する。必然、外的なエネルギーは縮小され、内的な作業に集中される。また、子供の問題状況は外的にも子供を医者やカウンセリングルームにつなげようとする動きを引き起こす。そして、子供の問題をとおして家族自体が再生していくことは臨床経験からもよく知られている事実である。さなぎはその状態にあることだけで周囲に問いを発し、その問いによって内的にも外的にも他者を動かす力をもっているといえよう。

3. さなぎは巻き込む

さなぎは「窓」という限局されたルートをとおして世界と関わりつつ自分の在り方を模索する。そして、そこで発見されたものは現実の他者をとおして確認される。事例では、柳沢教授という「窓」をとおして垣間見られた「自分」をもつ大人を貴明は父親にも発見し、その可能性を確信したいと思う。そのため父親にも「好きなことをしろよ」といってくる。父親からすればいわば大きなお世話だが、貴明にとっては必要に迫られて発した言葉だと理解できる。中井（1978）は、治療者と思春期患者に起こることを取り上げ、「思春期患者は、

（略）治療者の中で dormant state にある思春期をあばき出す力を持っているようだ」としている。中井は治療者との関係として記述しているが、思春期のテーマに大人が関わっていくと、必然的に関わる大人自身の思春期テーマが刺激され、再体験させられることになると考えられる。これは精神分析的にいえば子供が自分だけでは抱えられないテーマを投影同一化の機制により大人に投げ込んでいるという理解が成り立つ。大人は子供のテーマを生きさせられ、そこを超えることによって新しい大人となり、それに呼応して子供の問題が解決されることがある。しかし、これは受け止める側にとってはつらい作業となる。思春期のテーマは自分づくりや世界との関係の模索という根源的なものであることが多い。思春期のテーマは真正面から取り組む人もいれば、うまいことかわして真正面から向き合わずに大人に抜けていく人もいる。後者の大人にすれば、向き合ってこなかった宿題を再度突きつけられるようなものである。大人になった自分は社会で適応して生きていくためにそのような根源的問いにつかまっているわけにはいかないという思いが働くことも無理からぬことである。そのため、最初に述べたように「さなぎを見守る」という言葉を免罪符としてさなぎに巻き込まれることを無意識的に回避する大人が出てくることも不思議ではない。それを防ぐためにも、さなぎは他者を巻き込むこと、また巻き込まれた他者も同様にさなぎのプロセスを生きる者として見守られる必要があるとの認識が大事となる。子供も大人もともにさなぎの時期に参入し、内的成熟を守られるべき存在であるとすると、そこを包括的に見守ることができる専門家の存在が大切となってくる。ここに親子並行面接の必要性が見出されるといえよう。

4. さなぎにおける啐啄の機―世界を代表する柳沢教授―

啐啄の機とは、禅の話のなかで出てくる概念である。弟子が悟りを得られる段階に達したちょうどそのとき師匠が悟りのきっかけを与えるといった状況をさす。また、卵から雛が孵ろうとしたタイミングで親鳥が外から卵の殻をつつき孵化に手を貸すといった状況ともいわれる。すなわち、ある機が熟したちょうどそのとき、外的な状態が望ましい状況で呼応することを意味する。

貴明は自分がどう生きるかという悩みを抱えるなか、父親の姿をみたり、柳沢教授の姿をみたりするなかで、大人になるとは、生きるとはどういうことか、という根源的な問いを抱えていく。そして、とうとうその疑問を柳沢教授にぶつけることになる。いままで遠巻きに大人をわかった気になり、勝手に絶望しているともいえたなか、自分のもっている大人像とは違う可能性を感じる柳沢教授に現実に真正面から質問をぶつけることになる。「問う」とは命がけのものである。河合（2000）は「クライエントの問いに対して、カウンセラーはものすごく考えなければならない。普通の意味での質問と答えとはまったく違った重みをもっています。ときには、そこに命がかかることもあります」と述べている。問うとは、問う方も問われる方も場合によっては命を失ったり、根源的な変化を求められたりする行為である。

貴明は問い、柳沢教授はそれを受ける。教授は誤魔化すことなく真正面から問いに答える。教授の答えはあくまで個人的な考えともいえるが、同時に世界（大人）を代表する者の発言として貴明には受け止められたと思われる。貴明は得心する。まさに「啐啄の機」を得たといえるだろう。貴明が内的なテーマに解決をもたらすべく「現実の大人」に「問う」という存在を懸けた「対決」を迫ったとき、それを誤魔化さずに正面から向き合い答えた柳沢教授の存在が見事に一致したといえるだろう。もし、貴明の問いが時熟していないうちに柳沢教授から大人の世界を聞いても響かなかっただろうし、貴明の問いを受け止める人が別の大人で問いを正面から受けられないようであったならばこの展開は起こらなかったといえる。また、ここで父親が柳沢教授に正面から挨拶をする点も印象深い。自信なさげで偽りの姿で生きていた父がいわゆるインテリで社会的にもステータスが高い柳沢教授の前に子の父親として面と向かって姿を示す。ここにおいて、貴明の自身の内的な問い、柳沢教授との問答、父親の在り方が納得のもとに整い、貴明はさなぎから出立を果たしたのだろう。さなぎから出立するには啐啄の機を逃さず、かつそれに適切に対応できる他者が必要なのである。

V．まとめ

本論では、さなぎ状態を示していると考えられる漫画の事例をとおして、さなぎ理論の諸側面の検討を行った。さなぎという視点は当事者の内的成熟を「待つ」という視点をもたらしたが、「さなぎの時期を見守る」という言葉のもと、周囲との関わりから切り離される懸念も生まれた。しかし、さなぎの内実を検討していくと、さなぎは決して一者で成熟がなされるわけではなく、周囲と関係し、周囲を深く巻き込む形でプロセスを展開させていることが示された。さなぎと周囲との関係が切れてしまう要因の一端として、さなぎの閉じる側面が強調されていることが想定された。しかし、これは外的要請から閉じているのであって、内的要請の側面からみれば開かれており、「窓」をとおして外界とさまざまな交流が行われ、周囲も巻き込む形で成熟のプロセスが進行していくことが示された。さなぎのプロセスでは、関係する者にも思春期的テーマを刺激する形で苦悩をもたらすため、「さなぎを見守る」という言葉が無意識的に免罪符にされる可能性が考察された。そうならないためにも、周囲の者もまたさなぎプロセスに参与している者として見守られる必要があるとし、親子並行面接の意義が示唆された。この周囲をも巻き込んで進むプロセス全体が守られることによって、やがてくる「啐啄の機」ともいえるタイミングを逃さずにいることができる。本論をとおして、さなぎは外的要請からは閉じているものの、内的要請の側面からは関係を欲し、関係をとおして成熟し、蝶へと出立することが示された。

引用文献および参考文献

土井孝典（2021）．さなぎの中で遊ぶこと―「さなぎ」におけるセラピストの役割の諸相― 「臨床ユング心理学研究」Vol. 7 No. 1　pp. 5–15.

河合隼雄（1971）．コンプレックス　岩波新書

河合隼雄（1992）．子どもと学校　岩波新書

河合隼雄（2000）．人の心はどこまでわかるか　講談社＋α 新書　p. 123.

中井久夫（1997）．思春期の病理と治療　岩崎学術出版社　p. 4.

山中康裕（1978a）．思春期内閉．中井久夫・山中康裕（編）『思春期の精神病理と治療』 岩崎学術出版社.

山中康裕（1978b）．少年期の心―精神療法を通してみた影―　中公新書

山中康裕（1988）．こころの科学 20　日本評論社

山中康裕（1996）．臨床ユング心理学入門　PHP 新書

山下和美（1999）．天才柳沢教授の生活　第 13 巻　pp. 3–22.

ENGLISH SUMMARY

Chrysalis wants a relationship

—Relationship with others in chrysalis theory—

DOI Takanori

In this paper, I examined various points of view considering the state of school refusal that occurs with the theme of self-establishment in puberty and adolescence known as the “Chrysalis period”. The “Chrysalis” perspective has led to the understanding that it is important to wait and watch for the internal maturation of maladapted children, without forcing them to adapt immediately. On the other hand, there has also been a situation in which maturity is entrusted only to the parties with the role of “watching over the Chrysalis.” However, in reality, in the process of a Chrysalis becoming a butterfly the people around the Chrysalis are also involved, and through projective identification, the Chrysalis is made to live the same theme as the people concerned. In addition, it was shown that it is important not to miss opportunities for the Chrysalis to become a butterfly and that it is also necessary to have relationships with others.

Key Words: Chrysalis, self-establishment, projective identification, parental role, take the opportunity